

創作BL

「腕にたくさんほくろある人は頑張り屋さんなんですってよ」

「...」

ぼんやりしていたら、向き合って座って居た目の前の男がそう楽しそうに呟いた。

腕のほくろ？と思わず視線を落として見ていると、男が腕に触れて来た。

ひんやりとした指先が一つほくろに触れる。

「たくさんありますね、ほら」

そう言いながら指がほくろに次々と触れていく。

指先から、肘のあたり。

シャツと肌の境目。

その先に指が触れた時、びくりと体が震えた。

「...」

視線を外して俯いてしまったが取られたままの腕は引っ込めない。

真っ赤になった顔は何も言わず、その顔を見て緩く二の腕を掴んだ。

親指でシャツに隠れている腕を撫でる。

僅かに腕を引いたが、拒否は見られない。

力を込めて、自分に引き寄せると、驚いた顔で引き寄せられまいと体に力が籠った。

それでも気にせず口付けようと顔を近づけると、「駄目だ」と手を差し込まれる。

「...だめだ、」

弱々しい声が聞こえる。

何も言わずにその顔を見ていると、また視線が外れて俯いてしまう。

「どうして」

「...」

顔は真っ赤なままなのに。

耳に、ほくろを見付けて口付けた。

「!？」

「ここにもある、」

「、っ...！」

頬骨の横。

耳の下。

耳に近い首筋。

シャツに隠れた首のところにも。

「...もう、やめろ...」

「じゃあ本気で拒否して」

「...してる」

「してない」

「...」

「してない」

答えられなくなったその体を、ゆっくりと抱きしめる。

テーブル越しだった体が距離をなくす。

体の隙間に入り込んだ腕が、僅かに体を押し返したがその腕に力はない。

微かなその拒否に微笑ましくなり、気付かれないように笑った。

そしてもう一度、耳のほくろを食む。

「っ、...もうだめだ、」

「まだ言いますか」

「そりゃ、」

そうだろう、と顔を上げて何とか噛み付こうとするその顔は少し力がなく。

見上げて来たその顔に、ふと気付く。

「あ、」

「え？」

「ここにも、」

唇にあるほくろを舐め、口付けた。

今度は拒否もなく、でも少し息を詰めて、受け入れられた。

息継ぎの合間に漏れる声が、たまらない。

力の抜けた体が崩れないように少し強めに抱き締める。

背中に回った手が自分を抱き締め返して来た。

きっとこれは無意識に。

「...」

思わず口元が綻ぶ。

ホント、たまらない。